

漁村地域における最近の出稼ぎ問題

-- 熊石町の専業出稼ぎ者の追跡調査を中心にして --

松田 光一（北海学園大学）

1.はじめに

本報告は、1992年8月に実施した北海道爾志郡熊石町における出稼ぎ労働者の追跡調査結果の一部をまとめたものである。熊石の出稼ぎ労働については、北大教育学部産業教育研究室が中心になって1971年、75年、80年と調査を行い、「漁村地域における過剰人口の堆積と出稼ぎ労働市場の構造」にまとめた。それから12年がたち、出稼ぎ労働をめぐる諸状況もかなり変化してきていることが予想されたことと、また調査に参加した一員として当時調査に協力してくれた人々のその後の労働と生活を知りたいという思いから今回の追跡調査を試みた。

2.熊石における出稼ぎ労働

熊石は檜山支庁管内にあって出稼ぎ者の割合が非常に高い地域である。1954年の洞爺丸台風やその後の自然災害による漁業被害の影響で、漁業就業者数が激減し出稼ぎへの比重を高め、やがてそれが専業化していった所である。出稼ぎ者数は70年代のピーク時に較べると6割程度に減少しているにもかかわらず、就業人口も減少している関係で就業人口に占める季節労働者数や出稼ぎ労働者数の比率はあまり大きく変わることもなく推移している。90年度の出稼ぎ者の割合は21%程度である。最近の熊石の出稼ぎ労働は、①冬期就労者の増加＝出稼ぎの通年化、②道外へ働きに行く出稼ぎ者の増加、③出稼ぎ先の固定化、④出稼ぎ者の高齢化といったところにその特徴を見いだすことができる。

3.出稼ぎ追跡調査結果

今回の追跡調査は、前回の面接調査で協力してもらった54名を対象に実施した。そのうち本人ないし家族に面接できたのは35ケースであった。54名中、現在も出稼ぎを継続している人は21名、やめた人は25名、そして亡くなった人が8名いた。今回の調査で明らかになったことの1つは老後の生活に関するものであった。ここでは老後の収入源を国民年金に依存する度合いが高く、しかも60才から減額受給するため、経済的に厳しい生活を強いられている。第2に老夫婦のみで生活し、この地で人生を全うしたいという人々が非常に多いことである。都会に住む子どもとの同居を否定的にとらえる人々を受け入れるための社会的な諸条件の整備が急がれる。第3に出稼ぎ労働者の技能習得過程の問題、つまり出稼ぎ労働力の陶冶について個人ごとの職歴を追跡してみると、仕事の内容と技術習熟との間には強い関係があるということである。従来、技術習熟のための短期職業訓練が重要な意味を持っていたが、最近の出稼ぎの通年化と出稼ぎ者の高齢化は訓練・講習等の開催意義を低下させている実態が理解できた。